



58 2002.7
 (株)よかネット

NETWORK

- ひともうけ通信12
 - 人もうけ・よかネットパーティーの十年 2
- よかネットパーティーの舞台裏
 - ～第10回よかネットパーティー～ 4
- 地域で産業を生み出す…“ロダン21”の活動
 - 協同組合地域づくり九州の設立1周年記念セミナーから 6

見・聞・食

- ママの人柄、生き方の魅力で
 - 多くの出会い、ネットの輪ができる 9

近況

- アマナツの大変……
 - 農産物の流通革命運動の革命家大募集 12
 - 上海ガニのルール!? 13
 - 彼らは商売しながら滞在費用を稼いでいた
 - ～W杯観戦体験～ 13
 - よかネットへの感想やご意見
 - ～読者の近況報告～ 14

10周年を迎えました
 一話・一味・一芸による人もうけ交流会 ～第10回よかネットパーティー～

よかネットパーティー歴史 (1993-2002)

年回	日付	会場	特徴
第1回	1993/06/04 (金)	会館 (日/出ビル)	会館で初のパーティー
第2回	1994/06/03 (金)	会館	初の「人もうけ」をテーマにしたパーティー
第3回	1995/06/02 (金)	会館	初の「一話・一味・一芸」をテーマにしたパーティー
第4回	1996/06/08 (土)	本町 (有明山荘)	初の「お祭り」をテーマにしたパーティー
第5回	1997/05/29 (土)	瀬田神社	初の「お祭り」をテーマにしたパーティー
第6回	1998/05/23 (土)	瀬田神社	初の「お祭り」をテーマにしたパーティー
第7回	1999/05/29 (土)	瀬田神社	初の「お祭り」をテーマにしたパーティー
第8回	2000/05/27 (土)	瀬田神社	初の「お祭り」をテーマにしたパーティー
第9回	2001/05/19 (土)	瀬田神社	初の「お祭り」をテーマにしたパーティー
第10回	2002/05/18 (土)	瀬田神社	初の「お祭り」をテーマにしたパーティー

10周年を記念して、これまでのパーティーの歩みを年表にしました。(本文は2頁より)

人もうけ・よかネットパーティーの十年

糸乗 貞喜

●なぜこんなコトをやるの？

パーティーの第二回の時に「なぜこんな無駄なことをやるの？ みんな来て、うまいものを食べているだけで、会社の営業の足しになぞ、絶対になりませんよ」と言われてしまって、返事に窮したことがありました。言うてくださる人は批判的にでも悪気でもなく、ほんとにこんなコトをやっていて会社は大丈夫か……と言うことなんだが、何によらず、すべてに自信があるわけでもない私は、閉口してしまった。

最初のパーティーらしきことは、中洲中島町の裏通りから天神一丁目へ引っ越してきた「移転披露パーティー」でした(1987.11)。この時の「ウリ」も「うまいもの・うまい酒」でした。

●前史・(株)よかネットの歩みを少し

別表にあるように「(株)九州地域計画建築研究所」として、アルパックとは別会社になったのが、1982年のことであるが、経営が行き詰まったので「(株)九州地域計画研究所」として1984年10月に再出発しました。

その頃ありがたいことに、九州の将来を左右する「文化・科学技術の都市づくり」をテーマとする仕事をさせていただきました。

当時私たちは「将来はネットワークがカギになる」と考えていました。ひとり一人の個人も事務所づくりもです。たまたまいただいた、上記の仕事へ対する取り組みも同じだと考えると、そのコンセプトは「九州北部の都市をつなぐネットワーク型都市建設」となりました。筑波や関西学研のように新しい団地を作るのではなく、すでに建設済みで文化、伝統、味覚などが根付いた立派な都市に、最近の機能を取り入れたり、未利用地を活用すればよいという考えです。しかしこの考えはなかなか理解してもらえませんでした。「少し規模は劣っても首都圏や関西圏と同じものを」というコンセプトの180°方向転換になるからです。

そういう時期に、天神一丁目の表通りへ出て「移転パーティー」を持ちました。今で言う「人も

うけ型事務所づくり」です(人もうけという言葉を使いだしたのはもう少し後)。1989年には研究学園都市セミナーをやっています。別表に出ています。このころに「ねっとわーく通信」も出ています。

「よかネットNo.1」が出たのが1993年です。これは、何のコネもないオチコボレの集まりの私たちにとって、何か独自のネットワーク活動をしなければ、という決意の表れです。そして、その年の6月4日に「第一回よかネットパーティー」を始めています。今回調べていて思い出したのですが、その前日の6月3日に地方シンクタンク協議

(株)よかネットとよかネットパーティーの歩み

1982年 (S57)	1月	「九州地域計画建築研究所」独立
1984年 (S59)	10月	社名変更「九州地域計画研究所」
1987年 (S62)	9月	中洲裏通りビルから天神1丁目へ引越し
1987年 (S62)	11月	事務所披露パーティ(日ノ出ビル6階) (うまいもの・うまい酒パーティ)
1989年 (H1)	6月	第一回研究学園都市セミナー (9月まで5回開催)
1990年 (H2)	9月	学研都市セミナー
1991年 (H3)	3月	「にゅーす・れたー1号」 (北部九州学研ニュース)創刊
1991年 (H3)	5月	名称変更「ねっとわーく通信2号」 (北部九州学研ニュース)
1992年 (H4)	9月	「ねっとわーく通信9号」最終号 (NIRA助成研究「地域における文化・科学技術の推進」)
1993年 (H5)	1月	「よかネットNo.1」創刊
第1回	1993年 (H5)	6月4日(金) 10周年記念よかネットパーティ(日ノ出ビル7階) 「ひとネット・よかネット」配布
第2回	1994年 (H6)	6月3日(金)会議室 (人と人の出会いの場)
第3回	1995年 (H7)	6月2日(金)会議室(うまいもの自慢)
第4回	1996年 (H8)	6月8日(土)太宰府有智山荘 (人と人との交流の輪) ミニ編集号配布、どぶろくお目見え (8月現在地へ引越)
第5回	1997年 (H9)	5月24日(土) 櫛田神社 (参加型、日田の鮎登場)
第6回	1998年 (H10)	5月23日(土) 警固神社 (人もうけ、有田焼の皿)
第7回	1999年 (H11)	5月22日(土) 警固神社 (持ち寄り参加型、蕎麦打ち、壁新聞)
第8回	2000年 (H12)	5月27日(土) 警固神社参加者急増
第9回	2001年 (H13)	5月19日(土) 警固神社
第10回	2002年 (H14)	5月18日(土) 警固神社

会の研究発表会で、「民間の長所を生かして地域の小さなネットワークポイントに」というテーマで、私どもの事務所の方針のようなものを話しています。後に、「地方自治の窓」という雑誌に載せていただいています。千字で10ページもありますので、中見出しだけ拾い出してみます。

- ・日本の豊かさは、知的インフラによってもたらされた。21世紀の日本を切り開くものは知的インフラである
- ・九州における知的装備率の問題
- ・知的インフラ工場と地域の特色をどう結びつけるか
- ・知的インフラ形成における民間活力のあり方を考える……

この中で、「よかネット」という小さなニュースレター（A4版の2/3）を、所員の手づくり原稿・白黒印刷で出すことにしたと述べています。なお、民間の長所とは、特定の役所に気兼ねしなくていいことだと言っています。

<第一回、1993/6/4 10周年記念交流会 「ひとネット・よかネットパーティー」>

10周年とっているとおり、毎年やる積もりではなく五年に一回ぐらいの積もりでした。「ネットワーク時代だ」などと粋がっていても、本当にこんなパーティーが九州で受け入れられるのが心配でした。というわけで、簡単な理屈付けのつもりで、「小卓話」や「博多にわか」をお願いしました。とはいつてもウリは、アルパックのネットワークを生かした日本中の「うまいもの」でした。

一番遠くから来ていただいた筑波の河本さんに一言いただきました。「今日は本当に忙しくて、くるつもりはなかったのですが、たまたま『よかネ



第1回パーティーで配った「ひとネット・よかネット」

ットNo3』を見ると、柳川の水をきれいにするという話の中に“志”という言葉と、“地域の人々が持っている記憶”ということが書かれてありました。同じ地域づくりを手掛けるものとして、日頃コンセプトなどで、“思い”とか“志”などとは遠い言葉ばかり使っていた私は、その文章を見て愕然として、短刀を突きつけられた気持ちになって、これは『行けません』というわけにいかなくなりました。それで今朝は5時に起きてここまで来たのです。これには恐れ入りましたが、ありがたい言葉でした。

<第二回、1994/6/3 人と人の出会いの場をめざして> 参加79人（うち女性10人）

毎年やるつもりではなかったのに、参加していただいた方々の「こんな面白くて、いいことは毎年やらにゃー」という励ましにだまされて、第二回が始まりました。うまいものはウリの定番ですが、単なる「飲み会」ではないという心意気で、参加資格をつくりました。①面白い話、②うまいもの、③うまいものの情報、のいずれかを持ってきていただくことにしました。それがないと500円の罰金です。

お土産として、装飾古墳の特製テレカや小鹿田焼きのウルカ壺などを用意しました。まだまだこんなパーティーが受け入れられるか気にしていたのです。しかし、このときなんとなく、こういうことが求められている、という自信のようなものを感じました。

<第三回、1995/6/2 “花より酒・話より味”の情報交流＝うまいもの自慢大会> 51人(女性11人)

この年、私どもの事務所は「屋台村論」が盛んでした。クイズみたいですが、「会社」の反対はなんでしょうか。そう「社会」です。ネットワーク社会になっているので、所員ひとり一人が社会の中で働く、会社といってもそれは屋台村でしかなく、そこで「ひとり一人が店を出す」という考え方です。ですから、(株)屋台村としてのネットも個人としてのネットも広げようということでした。

この年は「うまいもの自慢大会」と称して、持ってきたものの自慢をしていただいたので、気に入った食べ物を自分でも取り寄せるために、持ち込んだ人にお店の紹介をせがんでいる人もいました。また「人が人を呼ぶ」という雰囲気が出てきて、人ネットのパターンができつつあるように思

いました。当所員手作りの薫製も好評でした。

<第四回、1996/6/8 太宰府の有智山荘＝人と人の交流の輪> 73人(女性16人)

事務所の会議室では限界に来ていたので、有智山荘をお借りしました。この家は西新にあった博労の家を原型にして、古材を活用して再建された民家です。こういうパーティーに打ってつけの舞台でした。

この年から、スタートは“ドブロク”で乾杯ということになりました。もう一つ大事なことは、土曜日の午後にしたことです。一挙にカジュアル化が進みそうに思いました。

<第五回、1997/5/24 櫛田神社

(ここは博多山笠の本山です)、参加型になり日田の生きた鮎(セゴシ、シオヤキになる)や手作り餃子(その場で講習会になる)など>64人(女性11人)

この年の準備段階で、いつも来ていただいている方に意見を聞いてみました。「もっと参加型に」、「持ち込みを呼びかけて……」、「自慢したい人のための持ち込み自慢コーナーをつくったら」、「準備段階から参加をよびかけたら」、「人が集まるには天神界限が便利」、「県外からの人には郊外での開催はしんどい」の意見をいただきました。

参加する人それぞれが、自分が主役になって出合いを楽しむということで、参加型になりました。

<第六回、1998/5/23 天神の警固神社、天神で人もうけの会> 78人(女性18人)

警固神社はアクセスも会場の雰囲気も、こんなラフなパーティーには打ってつけの場所でした。「人もうけ」という言葉を冠したのもこの時です。女性も増えて、急ににぎやかになった気がしました。手作りの食べ物の持ち込みが急に増えました。ゴミの減量を考えて、有田焼の皿を買っていただくことになりました。立派な皿で好評でした。

<第七回、1999/5/29 警固神社、壁しんぶん・そば打ちなど> 87人(女性18人)

持ち込み参加と手作りが進化して、「会場で手作り」が現れました。一人は私で、自分の畑で作ったそば粉で打ってみました。

<第八回、2000/5/27 警固神社、雨、しかし参加者急増> 135人(女性40人)

<第九回、2001/5/19 警固神社、自己紹介名札登場> 152人(女性37人)

この二回は参加者が急増して、10人程度の所員



毎回変わる有田焼のお皿

の対応限界を超えているようでした。一部には、仲間内だけで集まった飲み会のようなグループもあり「あれはだれな…」と聞かれるようなこともありました。せっかくの「人もうけの会」なので、次回は「そのことを、はっきりさせた会にしよう」と、反省会をしました。(いとのり さだよし)

よかネットパーティの舞台裏

～第10回よかネットパーティー～

愛甲 美帆

5月18日、五月晴れというよりは夏を思わせる日差しがふりそそぐ中、第10回よかネットパーティーを天神の警固神社にて開催しました。

●よかネットパーティの舞台裏

パーティーの準備は、企画担当者を3月に決定して始まります。(会場選びだけは警固神社はとても人気があるので、早めに決めて予約をします。今年は1月12日にとりました)。内容は企画担当者で案を作り、4月からはそれを基に、毎週月曜日に行っている朝会でパーティーの趣旨の確認、今年の企画、担当決め、スケジュール等を話合っています。昨年の反省を振り返ると、



とりたての山椒が入ったそば寿司

- ・150名の参加があり賑わった一方で、パーティーの趣旨である「人もうけ」がしにくい状況があった。
- ・せっかく持ってきていただいた料理を左から右に出すだけになっていなかっただろうか。
- ・所員の受け付けや盛りつけの担当交代がうまくいかなかった。

という点が挙がりました。これにより今回は、「人もうけをしたい人たちが集まり、楽しめる環境をつくる」、「モノ集めではない話のあるパーティーづくり」を念頭に話し合いを進めました。そこで、「一話・一味・一芸による人もうけ交流会」と銘打った案内状を出すことにしました。また、よかネットパーティーが今年で十回目ということで、これまでの歩みと前号でご紹介した津端さん探検隊の様子を壁新聞にしました。

当日の所員の役目も詰めていきます。去年の反省から交代は無理だということになり、今年はそのそれぞれのテーブル担当を決めることにしました。また、持ってきていただいた料理はすぐに出さず、テーブルが雑然としないように頃合いを見計らって出すようにしました。

五月に入ると、事前に取り寄せる恒例の品物(所員が一番楽しみにしている甘夏ジュレイ、洋酒ケーキ)や毎年人気の円のマークが入った有田焼のお皿の発注をします。また、所員の一話・一味・一芸の準備も各自始めます(乾杯用のどぶろく仕込み、薫製の準備、そば打ち、博多にわか netsuづくり...)。毎週月曜日の話し合いと前日の最終確認で所員が当日をシミュレーションして、今年はどうな出会いがあるか楽しみにしながらパーティー当日を迎えました。



受付もだいぶスムーズに

●それぞれの思いでつながるパーティー

今年のパーティーは、「一話・一味・一芸」と銘打った甲斐もあり、いろんな人たちの参加がありました。ゴミの減量を考えてパーティーでは有田皿を用意していましたが、エコ商品を開発しているグループから、日田市の竹を使った箸も届けられました。早めに来られてそば寿司を作っていた方にお話を聞くと、「このパーティーでそばを打ちを覚えて自分も始め、家内がそば寿司を思いついた」とのこと。そんな話をしていたところに、七山で林業をされている方は山の花々や山椒などを紙袋いっぱい持ってきてくださいました。山椒は、細かく刻んで先ほどのそば寿司に入れ、山の花々は皆さんから頂いた料理の妻として、テーブルを彩りました。数多くの花々を目の前にして「これは何ですか。」と尋ねる方もいました。また、前日まで何を持ってこようか悩んだといわれる呼子の女性加工グループが持ってこられた甘夏ケーキや砂糖漬けを宣伝して皆さんに配ってくださる方もいました。皆さんの思いのある一話・一味・一芸が出会いをより広げているように感じました。

今年は、125名(うち女性52名)の参加がありました。乾杯後、会場は1時間も経たないうちに、例年のような盛り上がりを見せ、人もうけの輪は広がりました。協力していただいた方々のおかげもあり、100名を超えた八、九回に比べて随分スムーズにパーティーを進められたのではないかと思います。後日所員の間では、「〇〇を食べておいしかった」と誰かが自慢すれば、「そういうものがあるとは知らなかった」とくやしがる場面もありましたが……。皆さんはいかがでしたでしょうか。

(あいこう みほ)

地域で産業を生み出す……“ロダン21”の活動

～協同組合地域づくり九州の設立1周年記念セミナーから～

尾崎 正利

さる4月22日に協同組合地域づくり九州が設立1周年を迎え、地域で内発的に産業を育成させるシステムについて、組合員と地域交流会員、地域のものづくりに関わる人たちと一緒に考えるセミナーを開催した。テーマは「地域で産業を生み出す“ロダン21”の活動」である。

講師は東大阪市で株式会社シナガワの代表取締役、異業種交流グループ「株式会社ロダン21」の代表を務めておられる品川隆幸さん。そして、品川さんを紹介して下さったのは財団法人大阪科学技術センター技術振興部調査役である下田正憲さん。下田さんと当社の系乗は関西で活動している異業種交流会「ため池の会」で出会って以来20年間近くのお付き合いである。

この日のセミナーは、まず下田さんから講師の品川さんの紹介をしていただき、次いで品川さんによる講演が行われた。お二人の出会いは、平成7年に中小企業創造活動促進法ができたときに認定窓口に品川さんがやって来たのがきっかけであった。

品川さんのお話の概要を以下にまとめた。

●仲良しグループではない新しいタイプの異業種グループつくろうと考えた。

- ・東大阪市では平成11年度には製造業が8600社あったが、この2年間で8100社に減った。しかし集積密度は今なお高く、小さなネジからロケット部品や飛行機のパーツなど大物まで、文字通り何でも作れることが最大のウリである。
- ・この地域には古くからのものづくりの伝統がある。神武天皇の代の鋳物や2600年前に始まった河内木綿などはその始期であり、電気動力がなかった頃から水力を使った工業などが盛んに行われてきた。
- ・そして代々、その時代のものづくり技術をもって、次の地域には新しい主力製品を作っていくという、新しいものづくり、よそにないオリジナルな技術を大事にする風土がある。
- ・株式会社シナガワは創業して30年になるパッキン加工の会社で、ゴムやプラスチックなど柔ら



ロダン21の社長の品川さん

かい素材を精密に加工する技術をうりものしている。この数年間は、1台の携帯電話の中に10数種といわれる小さなパッキン部品が好調で国内でもオンリーワンといわれる。

- ・平成9年、長年の創造的な技術と新たな技術開発への取り組みによって、創造法の認定をもらって助成金を得られるようになったが、携帯電話業界ではパッキン部品を海外で製造するところが増え、どこにもできない部品づくりというのは国内で(株)シナガワくらいだけになってしまった。
- ・このことで、世界経済の変化と日本の不況下では小さな一企業では、単独の努力だけでは生きられないという危機感をもった。
- ・その頃から、当時パッキン製品で様々なものづくりの分野に関わりがあったため「パッキンは物と物をつなぐものだが、それなら自分は何と人をつなごう」と考えて異業種グループに参加していた。
- ・いろいろなグループに参加していたが、入ってみて、目的もテーマも希薄で器だけという感じであるのに驚いた。イニシアチブをとるリーダーもなく、みんな仲間であるはずなのに、お互いが何をやっている会社かということさえ知らない状態だった。
- ・危機感を感じて新しいグループを作ろうとしていた時、東大阪市で新産業や新事業を立ち上げるための異業種グループの公募があった。市の

募集要件は「2年間助成金を出すので1年後には法人化せよ」というものだ。これに応募した。最初の頃は100社が集まったが、本気で参加したいという企業は減っていった。

- ・最終的に残った13社で平成10年4月に「21世紀を考える」という主旨で「ロダン21」を発足した。最初は1業種1社だった。市の考えでは東大阪市はものづくりの街だから、ものづくりの会社で構成したいということだった。

●「自分の発想で作ったものは売れない」ということが分かった2年目の売れ残り品見学会

- ・発足して1年目は視察や勉強会などを行い、2年目は各会社がお互いに何をやっているのか勉強することにした。各会社を訪ねると意外なことが分かった。
- ・元来、東大阪市のものづくりはパーツを中心とした技術のエキスパート集団であった。小さな町工場が多いため、試作品やパーツなどに強い一方で、大量生産の製造には向かない。それにもかかわらず、各社ともいろんな製品・商品づくりに手を出していた。
- ・行ってみると売れ残りが山積みされていた。商品を見ると、なぜか名前がない・説明書がない・パッケージがない、というものが多かった。「いいものなのになぜか売れない」と口惜しがっている。そこで早速「それならば、なぜ売れなかったか検討に入ろう」ということになった。
- ・売れると思って売れなかった製品・商品がいろいろ出てきた。「飛ばない練習用のゴルフボール」「カレーのルーの自動攪拌機付きの鍋」「いたずら防止ボルト」「プラスチック製の本の開き止め」「歯間電動歯ブラシ」「空き缶つぶし器」「家庭用炭焼き器」「アクリルの椅子」「鳩撃退装置」など。
- ・実は「飛ばない練習用ゴルフボール」は株式会社シナガワのものだった。ゴムの中でも衝撃を吸収する素材を使って300万円かけて3000個を作った。ボールのロスを減らしたいアマのゴルフファンにうけると考えた。念を入れてゴルフ商品店への販売も試みた。面白がって「くれ」という人はいたが、ついに「買う」という人は現れなかった。一個も売れなかった。
- ・それならばと、そのボール半分に切って、バンパーのショック吸収材やフォークリフト作業の

衝撃吸収材として売り込んだが、それでも売れなかった。また、新製品を作るのに金型を作ったり機械を買ったため、少ない販売量で割り算すると、商品単価がとんでもない値段になるものもあった。

- ・ロダン21では、まずそうした売れ残り製品・商品の「くさし合い」をやることにした。それをやると一生懸命にやって売れなかった本人は青筋立てて怒気を発したが、マーケットを無視したもの、自己満足のものには売れないのだということがみんな分かった。
- ・見逃せないのは各社ともいたってマジメに作ったことであった。確かに東大阪のものづくりの技術の高さは生かされたが、「ものが簡単に作れてしまう」ことが、かえってマーケットを意識しない失敗につながったようにも思われた。
- ・最初は「我々中小企業は組織が小さいから…」というのが原因と考えたが、みんなで検証した結果、「売れないものを作っていた」「自分の発想で作ったものはだめだ」「マーケットの発想でないだめだ」というのが共通理解になった。
- ・それから、やはり中小企業が1社だけでやると、色・デザイン・機能・コスト・ネーミング・パッケージまでのフォローは難しいということも分かった。

●「ものづくり何でも引き受けます」「売れないものを売れる製品に」をキャッチコピーに

- ・最初にグループの企業訪問を繰り返したことでプラスになることも多かった。それぞれの企業の技術的特徴や製品づくりのプロセスをお互いにつつま隠さず報告し合ったことで、仲間の企業がどういう工夫をして、どこに一番重要な技術の力点を置いているのか、おぼろげに分かるようになったからだ。
- ・今でも何か製品の試作を行う際に時々失敗はあるものの、一つの製品を構成する個々の部品の重要性、反対に優秀な部品を集めてよい製品づくりを手がけていくコーディネートの役割が重要だという意識はグループ企業で共有するようになった。
- ・こうした研究活動を、地域の企業の特性をもって、ロダン21では「売れないものを売れる製品に」「ものづくり何でも引き受けます」をキャッチコピーにした。メディアがそれに注目し、宣

伝してくれるようになった。

- ・その場合、「お客のニーズ呼び込み」と「コアコンピタンスの確立」（この技術だけはどこにも負けない）ということをしてPRするようにした。
- ・そのための組織づくりとして、異業種だけではなく、マーケットのリーダー役の企業も加えた15社がそれぞれ20万円出し合って300万円で協同組合を設立した。いろいろ検証した結果、ものづくりはするが、自分で製品を企画して製造ラインをもって作って売るのはやめて、注文をいただいて、製品づくりの企画や技術的なものづくりのお手伝いをしようという、ローリスク・ローリターン（ローリスク）の事業をやっていくことを決めた。
- ・ローリスクといってスタートしたが、実際には施主は見込み通りの完成品にしかお金を払わないため、コスト計算や施工法、全体の技術的なコーディネートなどについての、施主に対する一言の技術的アドバイスでも、より責任の重いものになっている。
- ・東大阪商工会議所にはものづくり推進室があって全国から年間400件のクライアントからの相談があるが、その約1割くらいは見積もりができる。いろんな相談に対して今まで、優秀で低コストな製品が完成しても施主の都合で商品開発にまで至らないという苦勞もある。
- ・グループの個々の企業の技術は優秀でも、組み立てると完全なものにならないということもあり、組立検証と設計・監理は最も重要である。
- ・施主の納得を得る完成品づくりにメンバー企業が関わっていく形態は、「企業の提携」（コラボレーション）というよりも、「企業の連合体」（アライアンス）として総合製造業を手がける新しい一つの会社という性格に近づいている。
- ・実際に始めてみて、一番重要なのはコアコンピタンスで「何を作れる」ということをはっきり言うことと感じた。「何か注文ないですか」というのではニーズとシーズが結びつかない。
- ・当初は若い人を社長にしていたが、事業を始めるとロダン21として社会的責任の重いことも増えてきたため、株式会社へと組織変更し（18社で）、自らが代表取締役役に就任することになった。
- ・当初の1業種1社ではなく、1業種10数社によっ

て、より競争力のある活動に高めようということで、中小企業のネットワークによるメンバークラスターをつくり始めた。

- ・そうしたクラスター企業とは、施主からの案件が特許申請をまだ出していない分野が多いことから、施主の権利の保護を徹底するために、必ず秘密保持契約を行う。メンバーの会期は月5千円で半年間となっているが、4年間で100社にまで増えている。
- ・施主から案件が来た場合、相談窓口の方で分野によって関わりのあるようなクラスター企業に呼びかけて企画会議を行う。
- ・具体的には「こういう製品はできないか」という問い合わせに対して、企画会議で「この案件について参加したい人（会社）」とこの指とまれ方式で参加を集める。名乗りを挙げる会社は、設計や成型、部品、機械など、それぞれの分野で特徴を発揮するよう最大限努力していく。
- ・その集まりを土曜日の夕方5～9時に行っているが、ものづくりそのものの活動は日曜日と第1土曜日以外の日は毎日行っている。時間は定時以外に続けてやる情熱が大事である。

【失敗の教訓】

- ①製造業が考えても売れない。
→注文を呼び込むような体制をつくる
- ②自己満足の製品をつくってはいけない。
→「必ずヒット」すると思っても、お客がいるかどうかは分からない。
- ③マーケットを無視している。
- ④デザインとカラーに無頓着
- ⑤データがない、検証がない
- ⑥ネーミングとパッケージ
- ⑦カタログが意味不明
- ⑧リサーチ不足
→ものまね製品になっている
- ⑨世の中にないものは売れない
- ⑩市場価格を無視した商品
→原価積み上げしかやらない
→市場価格の1/4の原価でつくらなければならない
- ⑪メディアの利用
→人の宣伝をする。自分のことばかり押しつけない。
- ⑫仲良し倶楽部からの脱却

・最近では「同じメンバーで製品を作っているのは活性化しないから、一緒に考えて欲しい」というコンサルタントとしての依頼も増えてきた。このためロダン総合研究所を今年設立する予定である。

●我々の協同組合の活動にも刺激が

今回の講演では、品川さんは自らの失敗を交えながら、設立までの背景と現在の活動について丁寧にお話された。現在、東大阪市をはじめとする近畿圏だけでなく、全国の産業起こし活動や異業種交流活動で呼ばれておられるそうだが、そこでは成功のためには数多くの失敗を乗り越えないといけないと言うようにしているとのこと。

最近、近畿経済産業局では「失敗情報調査委員会」というのを発足し、品川さんもそこに招かれた。成功事例は本でたくさん紹介されているが、失敗事例の本はない。失敗事例は隠れてしまっていて出てこない。失敗史を発掘し、関係者に話を聞き、

失敗の背景や理由、再生のきっかけを分析して、失敗から成功へと展開させるプロセスについて報告書をまとめるのだという。

この日のセミナーでは、参加者は北部九州を中心に、実際にものづくりをなさっている方もいて、質疑の時間には、同業種交流や異業種交流の活動面でそれぞれが抱えている問題について意見の交換があった。

我々の協同組合は月に1回のペースの定例会であるが、ロダン21の週1回の企画会議、ほぼ毎日のものづくりの活動など、知恵と技術を結集して取り組む様子に迫力を感じた。やはり何か事を構えるには、どれだけ真剣に取り組んだかということかもしれない。

講演会後の懇親会では、盛んにそうした意見が参加者から出されていたように思う。

(おざき まさとし)

ママの人柄、生き方の魅力で多くの出会い、ネットの輪ができる

山田 龍雄・梶原 里香

ママとは、親富孝通りの一角にある「モンブラン倶楽部」の中島美紀代さんのことである。

私の中島さんを知るきっかけとなったのは、春吉のある小料理屋のカウンター席の隣にいた方との、自己紹介をかねた何気ない話の中でのことであった。

「中島さんという魅力的ですばらしい女性がいますよ。夜はスナックをしているが、昼は手話教室、休日には志摩町の畑で障害者の方々と交流をしている」ということであった。このとき私は、ママは相当な“思い”をもっている人であろうと感じ、是非紹介して欲しいと頼んでいた。

すぐに返事はなかったが、ずっと気になる人であった。それから4～5ヶ月が経過して、改めて中島さんの紹介を頼んだところ、直接、本人からお電話をいただき、お店でお会いすることとなった。

●ママの紹介で客同士に出会いが生まれる

私が勝手に思い込んでいる普通のスナック（男性客がほとんどで、軽いつまみと洋酒をいただく

ところ）をイメージし、少し早めに行けば、十分お話をお聞きすることができるだろうと思い、19時30分過ぎにお伺いする約束をした。当日は、所員2人と私の3人で20時前ぐらいにお店に行くと、店の屋内部分（ここは8階建ての最上階にあり、屋外のテラスもある）には、すでに6～7割のお客さんが入っていたため、テラスの方で飲むこととなった。

お店の雰囲気は、私の単純な思い込みとはまったく違っており、中島さんの人柄とお客さんの幅の広さからくるアットホームな感じがするところであった。

とにかくお客さんの層が幅広い。外国人がいる5～6名程度のグループ、手話で会話している2人組、1人で来ている男性・女性、男性グループ等。私たちが店に入ってから数10分もすると、お店はてんでこ舞状態となり、この日の中島さんへの取材は諦めざるを得なかったが、十分にお店と中島さんの雰囲気を味わうことができた。

中島さんは、忙しい合い間をぬって私たちのテーブルに来て「素敵な女性が来ているのよ。きっと話が合うと思うわ」というなり、すぐに一人で来ていた女性を紹介してくださった。いつのまにか私たちのテーブルではその女性を囲んでの楽しい会話となった。

- ・1969（昭和44）年7月、知人の紹介で経営の思わしくなかったスナック（モンブラン）を引き継ぐ
- ・1980年頃、仕事のため声が出なくなったことをきっかけに手話の勉強を始める
- ・同じ頃、知り合いに紹介されMMM体操（後述）の教室に通い始める。その後、6年間イギリスのサマースクールに通い、指導者としての資格をとる
- ・1989（平成元）年、立ち退きにあったため、現在の場所にお店を移転する



これまでの記事を集めた30号の同人誌「さわやか」

また、一緒に同行していた梶原が「私も少し手話をやっていたんですよ」と言った途端、中島さんは「ちょうどよかった。今、カウンターにろうあ者の方が来ているの。紹介しましょう」ということになり、すぐに梶原は引張られていき、紹介を受けていた。とにかく紹介がスピーディであり、いつの間にか中島さんのペースでいろんな出会いが生まれている。

中島さんは、お客さん同士をさっと結びつけ、出会いの場を自然とつくっている。これがこのお店の魅力になっているようだ。

テラスではバーベキューをやっていたのであるが、忙しいとお客さんが自主的に従業員となって働いており、このいい加減さがまた魅力になっているようにも感じた。

この日は焼肉パーティで終わってしまい、改めて昼間にお会いする約束をした。

簡単に中島さんの歴史を整理したのが、上の表である。

●お客仲間で作る同人誌「さわやか」

モンブラン倶楽部では年2回、同人誌を発行している。発行部数は2,000部、うち約600部を関係者に郵送している。あとはお店に来た仲間に渡すようだ。

この同人誌のいきさつを、中島さんの話と同30号から抜粋させていただく。

- ・店にくる単身赴任の常連さんを中心に、日曜日にも楽しいひと時を過ごせればという思いで、自宅マンションでパーティを行う。
- ・定期的なパーティから、社会に何か貢献しようとの中島さんの呼びかけもあって、バザーを行い、この売上金を福祉施設に寄付するようになった。

- ・「さわやかに生きようよ」という思いから、この会を「さわやか会」と命名。これがお店ができて4年後の昭和48年のことである。
- ・中島さんの長年の夢であった「地元の皆様はもちろんのこと、全国に散っているモンブラン仲間に福岡の情報を提供して、お互いの絆を大切にしたいわ」との声に同会メンバーの有志によって同人誌を作ろうという話になった。創刊は昭和61年10月18日。

この同人誌の原稿は、締切日までにモンブランに届けることになっているが、これまでの15年間で一度も原稿が遅れた人がおらず、締切日には店のカウンターで書く人もいるとのこと（やや1人遅れる者あり?）。その責任感と連帯感も中島さんの人柄からくるのかも知れない。

当時、口の悪い仲間から「2～3号も続けばオンの字、途中でポシやるよ」と言われていたらしいが、15年間休刊もなく続いている。

また、この同人誌に投稿しているほとんどの人は、肩書きは書かず、個人名しか記入していない。これも中島さんの考えが浸透しているように感じられる。

●フランクな場と核となる人からネットは広がる

今、世帯構成は核家族化といわれて久しく、最近では単独世帯が増えたこと、あるいは家族であっても意識としての個族化現象といったことが生まれている中で、益々個としての主体的な活動や個と個の結びつきが大切なような気がする

このような流れの中で、「モンブラン倶楽部」のようなお店は貴重である。これは「モンブラン倶楽部」というフランクな場があることと、中島さんの意識的な出会いづくりといったコーディネート力があってこそ、個と個がつながり、つながり

れ、ネットは広がるようである。

今回は、障害者と一緒にやっているという畑にはおじゃまできなかつたが、是非、収穫だけでなく草取りもお手伝いをしたいと思っている。

(やまだ たつお)

●MMM体操と手話教室に参加

親富孝通りのママさんは日常生活でもとにかくお忙しい方である。

天神と香椎でそれぞれ月2回の手話教室、週1回は障害者や高齢者を相手に※MMM（マーガレット・モリス・ムーブメント）体操教室、休日を利用して志摩町のTOMOホーム（重度障害者施設）の近くに購入した畑で交流をしておられる。

お話を聞いていると「明日、ふくふくプラザでMMM体操教室をやるので、是非見にいらしてください」とのお誘いを受けたので、翌日にMMM体操を見学というより、一緒に楽しませていただいた。

毎月第1水曜日に開かれるMMM体操教室には主に西新碧園（心身障害者通所授産施設）と、背振少年自然の家の近くにある板屋学園（知的障害者入所更生施設）に通う障害者が参加している。私たちが参加させてもらった日も、20人くらいの人が集まっていた。

軽い柔軟運動から始まり、中島さんの指導のもと、音楽にあわせてゆっくりと体を動かしていく。とはいっても、「この音楽の時にはこう動かす」という決まりきったものがあるのではない。指導の通りに体を動かす人もいれば、音楽にあわせて自分の思うように体を動かす人もいる。中島さんはそれを見ながら、「いいねえ、上手だよ」「楽しいねえ」など一人ひとりに声をかけることも忘れない。どちらかといえばスローテンポの曲が多いが、途中「ほら、踊りたい人は前へ出ておいで」とアップテンポの曲をかけ、踊りたい人は思いっきり好きに体を動かす、ほかの人は周りで手拍子をし

MMM体操とは、1920年代にマーガレット・モリスによりイギリスで生まれた一種のモダンダンス。第二次世界大戦で負傷した兵士のリハビリとして行われ、体の動かせる部分を自由に動かす。

激しい動きではないので、あらゆる層の人が無理なく取り組むことができる。

ながらそれを見ているといったこともある。曲を少しずつ変えながら1時間、身体全身をしっかりと使う。終わった頃には、身体を動かした、という心地よさが残っていた。

MMM体操にボランティアで来ている人が、帰り際に「私もママに楽しく引っ張られています」と言われた。この言葉には、本当のボランティア精神が表われており、中島さんが何事にも楽しい場づくりを行っていることが伺われる。

また、2つの手話教室の生徒さんを集めた手話交流会をお店で開くと聞き、つい最近手話の勉強を始めたこともあって、ぜひ参加したいとお願いした。

土曜日の18時にお店に集まったのは女性ばかり13名。先生としてろうあ者の方が4名。手話教室の生徒さんばかりでなく、お店によく来る人も参加しての交流会となった。手話での自己紹介に続き、指文字（50音をそれぞれ指で表す）を「あ」から順番に練習。手話の勉強を始めて間もない人や今日が初めてという人もいたことから、手話の基礎ともいえるところから練習が始まったことに「手話」というよりもむしろ「ジェスチャー」という表現がぴったりくる私も一安心。約40分間の指文字練習の後、「今日あったこと」というテーマでろうあ者の方に手話で話をするようになった。言いたいことは決まっても、その言葉をどう手話で表したらいいかわからない。「すべてを手話で表現するのは無理。ジェスチャーでも何でもいいから、とにかく伝えてごらん」という中島さんの言葉のままに、とりあえず思いつきで全身を使って表現した。言いたいことを言葉でも伝えながら手話（というよりもジェスチャー）をしたこともあってか、ろうあ者の方には何とか言いたいことが伝わ



みんなで指文字の練習中

っていたようで、正しい手話での表現をろうあ者の方が丁寧に教えてくださった。

間違えたり、知らなかったりしたら恥ずかしいな、という気持ちで参加していたが、そんな気持ちはいつの間になくなっていて、伝えることに一生懸命になっていた。手話の上手・下手は大いに関係があると思うが、何よりも「相手に伝えた

い」という気持ちが一番大切なのではないか、ということに気づかされた。

中島さんのお店以外のこのよう活動が、新たなチャンネルでのネットをつくり、ネットの輪が広がっているのであろう。

(かじはら りか)

近 況

アマトツの大変……

農産物の流通革命運動の革命家大募集

今年もアマトツの大豊作で、少なくとも5600kgは獲れました。その処分が大変で、またまた各方面に、下記のような手紙を添えて送りつけました。

『アマトツの迷惑宅配便』

毎朝、ウグイスの声で目を覚まし、緑の風を楽しんではいるのですが、アマトツを持って余しています。アマトツの便りです。今年は少々取り込みがあって、収穫が遅れました。

言い訳ついでに、私の経験をひとつ。むかしむかしの4～5月頃に「野菜か果物を採らないと健康に良くないぞ！」などと思って、安物買いの根性で三個百円（今の気分）ぐらゐのアマトツを買ったら、皮はみずみずしいのに中が白っぽくなっていて、カスカス・パサパサで水分がほとんどないものに当たりました。

「みーかんーの花が……」という歌がありますが、それは今頃です。先日、アマトツの最後の収穫をしましたが、もう花が開きかけています。そこで私は考えた。あまり長いこと収穫しないと次の世代の邪魔をする？ 逆に実に入っていた栄養分を次の世代のためにまわす？ ということで水分が抜けてしまうのではないか。

アマトツ系統のものは、少し早い目に収穫して一ヶ月ぐらゐ置いて食べた方がおいしいようです。この迷惑便のアマトツは、樹上で十分熟して、その上収穫後二週間ぐらゐ経っています。

ご面倒ですが、実を全部入れた（皮も）マーマレードを作ってみて下さい。ジューシーで食べやすいマーマレードができます。生食もちろん旨いです。

というわけで、私の家では「水分たっぷりのジャム風マーマレード」をしこたま作りました。私には農薬を扱う能力がないので、皮も安全です。

ある日なにとはなしに、家の庭から遠くを眺めていると、オレンジ色の小さな山を見つけました。アマトツが軽トラ1～2杯畠の角に捨ててあるのです。その2～3日後に、クルマで通りながら樹上に放置したままのアマトツ畑をたくさんたくさん見ました。樹上に放置すると樹が痛みます。悲しい風景です。その頃、この近辺のスーパーでは、段ボール箱一杯(10～15kg、30～40個はある。段ボール付きの値段)850円でした。農産物直売所でも5個150～200円ぐらゐです。1個30円というところですか。それでも売れば、農家の人たちは収穫して売りますが、売れないと箱代だけ損をします。

私の革命というのは、①農家に収穫の手間賃＋下草刈りの手間賃＋油粕などの肥料代＝10キロ千円ぐらゐ、②クロネコさんに千円余／10キロ、③受注・発送センターの手間賃500円／10キロ……その結果、④東京や大阪の団地の部屋にアマトツの香りが充満し、毎日々々おいしいジャムが食べられる。もちろん、無農薬の安心第一の絆で守られています。革命とは空想の世界でしょうか。ジャムの味は頑固な現実だと思えますがね。



もらい手のないアマトツ

ところで、私は毎日革命の産物を食べています。いい気分ですよ。

空想の内一番むつかしいのが③の受注・発送です。これはNPOの小遣い稼ぎでできませんか。特に面倒なのは「宅急便の宛名書き」です。④の方で書いて送ってもらうと間違いがないのですが。以上、私の夢の中では、①から④まで全員がトクをするように思えるのですが。(糸乗 貞喜)

上海ガニのリール！？

大牟田市に「年金通り(通称)」というところがあるという。名称からは何の通りなのか想像できない。たまたま、そこへ行く機会があった。

通りに軒を連ねる店々から酔っぱらって気持ちよさそうなお父さん方のカラオケの歌声が聞こえてきた。まだ明るい夕方の6時頃である。もう夜の10時か11時頃の雰囲気だ。

「年金通り」の名前の由来は「朝早くから年金生活者でにぎわう飲屋街」だからである。カラオケの歌声のお父さん方は昼過ぎぐらいから飲んでいたのであろう。

なかでも「小料理 りいる」は私には強烈なインパクトがあった。80歳の“ママ”は肌の露出の多い(色っぽい!?)衣装で現れた。まだまだ現役である。

店のお客さんは平均年齢60~70歳くらい。朝8時オープンで、朝は若い(ママの言う「若い」は60歳!)客が多く、お客さんは朝から一杯引っかけカラオケを楽しんでいるという。ママは毎日夜12時まで立ちっぱなしでお客さんのお世話をしているということだった。

ママは19才の時に金持ちの貿易商と知り合い、上海に渡った。この頃の生活は幸せいっぱいだったと何度も語っていた。後に敗戦。夫と死別し、女手一つで子供を育てることになった。それまで裕福な生活をしてきたため、料理もろくにできなかったママは屋台を転々として料理を学び、約40年前にこの店を開いたということだった。(取材時、私は酔っていたので多少話の違うところがあるかもしれないことを断っておく。)

ママは若い頃の写真(上海から持って帰ってきた唯一の写真)を見せてくれた。紙面で紹介できないのが残念だがとても美人だった。

店内では軍歌や演歌のカラオケが鳴り響いていた。カラオケのバックに流れる映像が戦時中の記

録映像や古そうな白黒映画だった。

そうこうしていると「上海帰りのリール」という歌が流れた。ママは自分が上海帰りであることから、「リール」の名を付けた。「りいる」って何だろうと思っていたのだが、本来「りる」という表記がなされるべきだったのである。暖簾屋さんが「りいる」と聞き違えたとのことだった。ママはお客さんに「りいるって何?」と聞かれると冗談で「上海ガニのリールのこと」と答えるということだった。年齢を感じさせない明るいママである。

高齢社会は暗いイメージをする人が多いが、この通りを見てほしい。ここはシルバーエイジのパラダイスだ。(小田 好一)

彼らは商売しながら滞在費用を稼いでいた

~W杯観戦体験

今回、W杯サッカーで試合を見る機会に恵まれた。私が観戦したのは横浜国際競技場で行われた予選リーグE組のサウジアラビア対アイルランドの試合。

6月11日夕方、試合の4時間前の風景。最寄りのJR新横浜駅から会場への道は交通規制で歩行者専用となっている。既にアイルランドのサポーターが大勢、太鼓を叩いてお祭り騒ぎ状態だ。彼らの多くはアイルランド系の白人で、チームのユニフォームTシャツ(草色)を着て、頬には国旗のマーク。カエルのかぶりものを身につけた人、全身国旗カラーに塗り分けた人、長期宿泊のホテルの室内着の浴衣を着た人もいた。多くは20~30代の若者だ。40代以上となるとさすがに落ち着いており、スーツ姿でオープンカフェに座りで大勢でウイスキーなど飲みながら談笑しながら仲間を待っているようだ。

よく見ると日本人の若者も数多く一緒に応援チームに加わっている。対戦国のサウジアラビアのサポーターの姿をほとんど見ないのはどうしたことか。この試合の前の時点で予選敗退が決まっていたとはいえ、応援がない中での戦いは選手達も寂しい限りであろう。

道の途中、あちこちで露天商が開かれてユニホームやマフラー、バッジ、ペンダントなどが売られている。FIFAやJAWOCの公認グッズ販売テントもあった。見たところ公認グッズよりも母国サポーターの売っている品の方がセンス、品揃えともに魅力的だった。

私の気分として、にわかアイルランドサポーターになるのは気分的には少しためらいがあった。第一、選手の名前さえ満足に知らないチームではないか。それに緑色のグッズは後日使うには少し派手だろう。

この日、熱帯性低気圧の影響で強風が吹き少し肌寒かったので帽子をさがした。そこへアイルランドサポーターの若い白人男性がやって来てこれを買わないかと手招きをする。見るとベージュの落ち着いた色でなかなか感じのよい帽子だ。値段は1000円で思ったより安いので買うことにした。

小物売りが立ち去った後、さあかぶろうと思っ



街にあふれるアイルランドサポーターたち

よかネットへの感想やご意見

～読者の近況報告～

NO.57号に同封していたハガキで、本誌に対する様々なご意見、読者の皆様の近況が寄せられました。ここでは、その一部を紹介いたします。

■ギンナンは、今秋いよいよ初出荷の予定です。米と同じ程の売り上げを見込んでいます。12年目の2つの畑は、ごちゃごちゃに植えた他の果実の木も年々大きくなって、うっそうとした熱帯のジャングルようになって来ています。パーティー一度行きたいものです。(滋賀県 村田三郎)

■毎号楽しく興味深く読ましていただいております。私も旅が大好きで、暇を見つけてはあちらこちらとぶらり旅を続けています。街は文化の香りがします。日や時間帯が違うだけで色々な表情をみせてくれます。おそらく、皆様のような人たちが街を愛して色々な仕掛けをしているからだと思います。同じ街でも何回となくいってみたいくなる

てよく見たら、なんと帽子はリバーシブル。しかも裏の色はしっかりアイルランドカラーのグリーンだ。念の入ったことに国旗の刺繍までであった。

うーむ、さすが。参った。彼らは母国チームのサポーターを増やしながらか稼いでいるのだ。日本語のできるアイルランド系の白人に話を聞くと「W杯では訪問国で滞在費を稼ぎながらサポーターを増やしている人は大勢いますよ」とのこと。今回の大会では、特に物価が高い日本で開催されているので、来日するだけでも相当な費用をかけている。来るからには母国チームが勝ち抜いていく姿を最後まで見届けたい。そのための生活費稼ぎの手段が、てっとり早くサポーターをグッズで増やすという商売になるのだという。

試合は65,300名の観衆が見守る中、小雨と強風が舞う悪コンディションだったが、両チームとも随所に好プレーを連発し喝采を浴びた。結果は当日のにわかサポーターを着実に増やした甲斐あって(?)、アイルランドが3-0で勝利し、決勝トーナメントにコマを進めた。

(尾崎 正利)

街づくりガンバって下さい。私もガンバってみたいですよ。(大分県 井出晃)

■いつも興味深い記事楽しんでいるばかりか参考にさせていただいています。終いの住まいとしてコーポラティブ住宅に住みはじめて4年。なかなか快適です。コーポラティブ的町づくり、地域づくりつまり自分たちで地域を創っていく楽しさ、若しさ、難しさを味わいながら地域をつくって行きたいものです。これからも続けてください。お願いします。(東京都 山野宏)

■日田市で製材業で杉板を挽いています。それが進歩して内装材を宅配するようになりました。それから最近では杉材に接着剤も使わず無塗装でフリーハンドで書けるくらいの家具も受注一品生産もできるようになりました。ただいま折り畳みイスとテーブルができます。そして病院よりICU室のテーブルを制作中です。(大分県 横尾達也)

■今年も中国詣でが続いています。4月までで5回、約30日の滞在です。今年は教育係、物流係、人材紹介などのサービス業の経営者の依頼が多くなりました。中国も三次産業の時代になりそうで

す。1月に学芸出版により都心居住という本をインターシティ研究会メンバー共著で出版しました。

(大阪府 宮川敬章)

■4月から東海地方に転勤になりました。「よかネット」の記事は、日頃私が扱っているビジネスレポートとは違って、等身大で見聞きし、語り深めている点がとてもいいと思います。最初はずいぶんとのんびりしたレポートだなあと思いましたが、最近では、実は未来を先取りしているのではという気がしてきました。

(岐阜県 大竹亮)

■4月から5月にかけて一年で一番の農繁期です。現在は“茶”の製造の真っ最中です。忙しいのですが、八十八夜等季節が満喫できます。これが一段落するとホテルの季節、田植えと続きます。自然の一部である自分を実感します。

(浮羽町 河北宣正)

■近刊の九州国立博物館報に「九州の伝来菓子」を寄稿しました。広大な福岡市博物館のさらに1.5倍の九州国博に何を展示するかという議論があるようですが、アジアを中心とした海外よりの膨大な文化の交流の十字路であった九州にはそれぞれ展示しきれないほどのモノがあるように思われるのですが、いかがでしょうか。

(佐賀県 村岡安廣)

■時間預託制のたすけあいボランティアを全国ネットで展開しています。高齢者在宅福祉の他に幼老共生を目指して子育て支援「親子のひろば」を6月3日から始めます。

(春日市 松本隆幸)

■毎号楽しみに読ませていただいています。昨年、市町村合併の推進を担当しています。今年中に合併協議会を立ち上げていく予定ですが、合併のキーワードとして「住民参加のまちづくり」と言っているのですが、どこまでできるか時間との勝負といったところもあります。埼玉では、法定協が2つ、研究会が8～9つの地域で立ち上がり議論が活発になっています。

(埼玉県 香田寛美)

■いつも「よかネット」を送っていただき、毎号毎号情報発信の質量ともに敬服いたします。読み終えると満腹感で食休みが必要です。特に前号の郡是の項は大感激です。前々からストックの「郡是」は気になっていたのですが、地域のプランニングにつながっているとは思わなかった・・・

(東京都 岡本一彦)

■USJと阪神タイガースに寄り掛かっている大阪・・・元気がありません。道頓堀にあった芝居、演劇小屋、映画館も次々と姿を消し、御堂筋寄りの松竹座一つになってしまいました。東京から進出してきた居酒屋チェーン店が幅を効かせつつあり、風俗店の進出も盛ん。繁華街の姿も大阪らしいアットホームな雰囲気が無くなりつつあります。低迷な大阪・・・どうなる！！

(奈良県 竹本俊平)

■近頃、卵（つまんでご卵）が足りなくて足りなくて、正常な営業活動を行うのに支障が出そうでこわい。だれでもいいのでフランチャイズに参加して卵を生産して下さい。

(志摩町 早瀬憲太郎)

■私が今住んでいるのは中央区ですが、中央区とはとても思えないようなディーブな下町です（コテコテ）。長屋が並び、住民はみんなよく家の外の路地に出てくるため（私も気がついたらよく外に出ている）昔なつかしい近所づきあいがサカンです。こんな暮らしが気に入り、近々実家の両親も呼び寄せることになりました。高齢のため私が面倒をみるためですが、ここでならできそうな気にさせてくれるところです。

(福岡市 谷口みゆき)

■私ども「奈良まちづくりセンター」でも糸乗さんの「郡是」の話し等を参考に、協同組合とまでは行きませんが、地域コミュニティービジネスの創出を検討しています。情報交換だけではなく、何等かの連携ができるようになればと夢想しています。

(奈良県 宮本孝二郎)

■最近では地域名を冠にした「地域学」が盛んです。東北学、日本海学、……。私は現在、筑波の地で学校法人（2つ）新聞社、社会福祉法人（2つ）などに関係していますが、そこで「新世紀つくば学」を提案しております。その狙いは、異文化交流をすすめた異能種交流であり異脳種交流です。ここから21世紀の問題発見さらには解決があると考えからです。「よかネット」も同じ考えだと思いますが多くの方のご意見をお聞きしたく存じます。

(茨城県 西谷隆義)

■4月末に6年ぶりに中国広州交易会に行ってきました。日常の雑貨品は中国に完全に負けた！！と思えました。どうしたら勝てるのでしょうか？彼等の物量を利用して商いをしなければいけないの

だろうか？自信をなくして居ります。良い知恵があれば拝借したいです。（大阪府 藤本義行）

■少し前から関西学研都市内の「交流と連携」をいかにするかという研究会をもち、種々検討しています。イベントや講演会等は数え切れないほどオファーされていても、住民の不満は多いわけです。参加型・双方向型でないからですし、企画が将来への展開を持っていないからだと思っています。よかネットの記事を大いに参考にしています。

（大阪府 後藤誠一）

■先日、けいはんな学研都市の中心、光台ニュータウンを訪れました。ゆとりを持った街路、電気の引き込み線は地下埋設などなど良い街でした。しょう洒な研究所群は環境と調和していました。しかし、何か「ツン」として澄ましています。もっと住民との交流の場があっても良いのではないのでしょうか。もちろん文化ホールもあります。し

かし真の交流はもっと日常的なものでしょう。例えば各研究所のレストランなどを市民に開放する。所員の住宅は、地域に散住させる等々です。これからの科学は、そのようなスタンスが大切と思われるてなりませんでした。（佐賀県 伊藤榮彦）

■何やら余裕のない時代ですが、こういう時こそ人とのネットワークが大切。大変でしょうが、皆様の活動の継続、頼もしく見つめております。がんばってください。（神奈川県 宮地謙一）

■地域社会にかかわるためには、人の交流が不可欠です。「人もうけ」は社会性を養う上でも大事です。（福岡市 鍋山徹）

ここで紹介しきれませんが、皆様から様々なご意見や激励を数多くいただきました。これからも思いのつまったよかネットづくりを目指していきたいと思えます。

前号記事についてのお詫び

当機関誌は、「サービスを通して皆様のお役に立つ」という視点のもと、仕事で学んだこと、地域づくりに役立つ情報、新しい計画手法等、を提供するという編集方針で発行しており、毎号の編集責任者は交代していますが、この方針を常に踏まえて編集しているつもりです。しかし、前号記事「自然に産むということ」の中で、この趣旨にそぐわないと思われる部分がありましたので、ここでお詫びを申し上げる次第です。今後このようなことが起きないように、所内において編集方針の再確認をいたしました。今後とも、よかネットに関する率直なご批判、ご指導のほどよろしくお願い致します。

（所員一同）

編集後記

最近研究資料を集めに図書館によく行くが、書籍探しを手伝ってもらうときに、対応してくれる人によって得られる情報に偏りがある。頼まれた資料だけ出してくれる人もいれば、関連書籍を丹念に調べてくれる人もいる。図書館は情報サービスを営んでいると思いながら仕事をしているか、していないかの違いが出ているように思う。私も情報サービス業に関わる者として、ユーザーにきちんと情報を発信しているかどうかを考えさせられた。(ほ)

よかネット No.58 2002.7

（編集・発行）

（株）よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

<http://www.yokanet.com>

[mail:info@yokanet.com](mailto:info@yokanet.com)

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 03-3226-9130

（株）地域計画・名古屋 TEL 052-265-2401